

高田バッティングセンター 岩手県陸前高田市

まもなく東日本大震災から2年を迎えるが、津波被害が最も甚大だったといわれる岩手県陸前高田市で、いち早く復旧した施設のひとつは、なんとバッティングセンターだった。津波で消失してしまった市の中心部はいまだにがれきに覆われ、復興への道のりは遠い。それでも、地元の人たちは束の間の娯楽を求め、ボールを打ちに出かける。苦難の中にも野球があり、がれきの町ではきょうも打球音が鳴り響く。国内47都道府県800カ所以上、アメリカ29州とカナダ2州でもバットを振り、このジャンルでは世界の最先端を行く筆者が、バッティングセンターの視点から被災地を考えた。

(バッティングセンター研究者・吉岡雅史)

写真では伝わりにくいですが、ピッチングマシンの後方には太平洋が見える

陸 前高田といえば、奇跡の一本松を思い起こす人が多いだろう。海岸線にあった7万本の松原は、1本を残して全滅。倒れず残った松の雄々しい姿は、全国に配信され、復興へのシンボルとして我々の知るところとなった。筆者が現地に着くまでには、松が保存処理のために切られる直前だった。仙台から一関を

經由して、レンタカーで約4時間を要した。一本松の周辺には横浜ナンバーや浜松ナンバーの車まであったが、筆者はひとまず素通り。市街地に入るとカーナビの音声は「高架からバイパスに」次の信号を左と悠長に指示するが、そんなものは一切なくなっている。ナビの表示は大混乱しっぱなしだった。

一 本松から3キロ北東の丘の中腹、りんご園の隣に「高田バッティングセンター」は建つ。

「正直、商売としてはメチャクチャ大変ですよ。なにしろ町がなくなっていて、ほとんど避難しちゃってるんですから」



津波被害直後の写真ではなく、これでも再建後の店内。手元にある材料だけで修理した

経営者の小山(おやま)功さんは静かに話した。風が通って涼しいからと、店の裏側で話したのだが、そこから見渡す市街地は、がれきの荒野と化している。市では全世帯の7割以上が被害を受け、2万4246人いた市民のうち、生存が確認できたのはこれまでに2万2018人。人口の1割近くが死亡あるいは行方不明となった。

ありあわせの材料で再建させた店舗は、被災前なのか被災後なのか区別がつかないような状態である。にもかかわらず、平日の日中ながら1組また1組と客が訪れた。

小山さんは「本当にポロポロですよ。でも、遊ぶところが全部なくなっちゃってしまっただし、野球をするような

津波に屈さぬ親子の絆、奇跡の自力再建



急死した父 親の跡を継ぐ小山功さん

うぐらゐ、感動的な営業再開だった。

ところが再開から半年も経たない10月に、国雄さんは他界してしまふ。気仙沼でサラリーマンをしていた功さんは、迷うことなく退社し、40歳で跡を継ぐことにした。

「すべての力を使い果たしてしまっただけでしようね」と功さんは、か細い声で話した。すぐさま、目を見開き「オヤジが命を削ってまで続けた店だからと、海の方向を見詰めながら続けた。

陸前高田市は岩手県内有数の野球の盛んな土地で、地元のクラブ

チームは全国大会にも出ているし、市内唯一の公立・高田高校も甲子園出場経験がある。だから震災に関係なく、バッティングセンターの存在価値はあった。

オ ヤジはよく、店は古くても「コントロールドさえついていれば、いつでも客は来る」と言っていました。その通りでした。これだけオンボロでもお客さんは来てくれます。電力が足りないんで、日没までしか営業できませんが、

地域全体の復興を考えれば、バッティングセンターのような遊戯施設は優先順位では一番後回し

場所もないから、みなさん喜んでくれますね。だから頑張らないと話す、幾分表情を和らげた。

営 業再開の一報を耳にしたのは、一昨年のゴールデンウィーク明けだった。筆者は思わず言葉を失った。というのも、宮城から青森まで三陸沖にバッティングセンターは点在していて、10年ほど前に縦走済みなのだが、陸前高田が最もオンボロだった。そこに、高台の店を1・5kmの津波が襲い掛かったというから、「こりゃ、ひとたまりもなかったらうな」と、てっきり思い込んでいた。

先代の父・小山国雄さんは、御年74歳。店舗の老朽化に加え津波被害である。年齢の点からも再建など不可能だろうと、筆者は勝手に判断していた。

震災後10日ほどしてから、やっと店の様子を見に行くと、ネットや外壁は流され、敷地内はゴミの山だったという。ただ、7台あるピッチングマシンはモーターがやられただけだった。「もう一度頑張るか」。かつて社会人野球でプレーし、還暦を過ぎても店内最速の140キロの剛速球を普通に打

だろう。陸前高田の市街地では1年経つてようやくガソリンスタンドが1軒完成しただけである。それでも、雨露をしのげる住まいを確保でき、食べ物に欠け不安がなくなる、人は生きていく上で娯楽を求めるものだということ、被災地のバッティングセンターが教えてくれた。

だから、身勝手に不謹慎な願望だと怒らないでいただきたい。軟式ボールと金属バットが奏でる様々な打球音が、東北復興への槌音とならんことを、祈るばかりである。

